
ザフィーラキャンキャン

虹鮫連牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザフィーラキャンキャン

【Nコード】

N7023T

【作者名】

虹鮫連牙

【あらすじ】

アルフの勧めで小型犬モードになったザフィーラの、ちょっとした日常物語。

「いやぁ実際、この姿だと外に出る時も物騒じゃないし、燃費も良
いから、快適で便利だぞう」

目の前の赤い使い魔はそう言った。

確かに体のサイズが小さければ、周囲の人間達にも不要な警戒心
を抱かせることは無いかも知れない。加えて摂食量が減ることによ
って、この世界で生きていくために必要な金銭を節約出来るという
利点もある。

とするならば、赤い使い魔アルフの助言は素直に聞き入れておく
べきだろうか。

今話を聞いて、他の騎士達はどう思っているのかも気になる
ところだ。ちょうど三人とも側にいることだし、意見を求めてみるか。
私はすぐ隣でこちらを見ている三人の守護騎士に視線を向けた。

お前達もアルフと同じように思っているのなら、私は従うことを厭
わないのだが。

「……………そうなのか？」

「うーん」

「どうだろうか？ 普段の狼の姿でいるよりも、アルフのように小
型の獣姿になった方がいいだろうか？」

三人のうち、真ん中に立っている幼い少女の姿をした騎士、ヴィ
ータが言った。

「まあ、お前の好きにしたらいいんじゃないか？ 普段のでっかい
狼の姿だと、近所の子供を泣かしちまうだろう」

「そうねえ。小型犬モードの方が可愛いし、いいんじゃないかしら
金のシヨートヘアを揺らしながら、騎士シャマルが微笑む。

三人のうち二人は賛成か。しかし、我等守護騎士の将、シグナム
の意見も尊重したいところだが。

「シグナム、どう思う？」

「好きにしたらいい。きつとどちらの姿になっても、主は変わらずにいてくれる」

そう言ったシグナムが、結わいた長髪を靡かせながら踵を返した。さすがは我等の将だ。彼女の言う通り、主はやてと我々の絆は強い。姿一つで壊れたりなどはしないことは、始めから分かりきっていたことだ。

「ならば……………」

私は自らの体を変化させ、アルフに倣って小型サイズの獣姿になることを決めた。

姿を変えてみると、目線の高さが思ったよりもずっと低くなって少々戸惑った。見る高さが変わるだけで世界がずっと大きく、空が遠くなつた気がする。

遅しく長かつた足も綿毛に包まれた苗木のような細さになり、鋭く光っていた牙も折れた剣の破片のようで頼りない。

慣れるまでは少し時間が掛かるか。

「おお！ ザフィーラ可愛いじゃねえか！ よよし」

「本当！ もうギユウツってしたくなっちゃう！ 撫でさせてえ！」
ヴィータとシャルマルが私の体に纏わりついてきて暑苦しいが、どうやらこの姿は仲間達にも笑顔をもたらすようだな。

「ようし！ ザフィーラ、アルフ！ 散歩に行こうぜえ！」

ヴィータが一度家の中に戻っていく。その間、シャルマルはずっと私の体から離れなかった。

しばらくして、ヴィータがその手に首輪を二つ持って戻ってきた。若干のくすぐったさに耐えながら、私は首輪が巻かれるのを待った。

しかし不思議なものだ。ついこの間までは激しく敵対していた私達が、よもやこうしてかつての敵と散歩をすることになるうとは。

しかし、それもまた悪くはないか。

首輪を付けられたアルフが、元気よく飛び跳ねながらヴィータとじゃれ合っている。

「きゃんきゃん！ くううん！ わふう……わおーん！」

「おいアルフ、はしゃぎ過ぎだぞ！ へへへっ！ こらあ！」

この世界に来る前の我々では、知ることの出来なかった幸福感。平和な光景だ。

悪くない。

ならば私も時代に合わせてみるか。この平和で幸せに満ちた時間を堪能することが、何だか心地良いものに思えるのだ。

はしゃぎ回るアルフとヴェータの側に歩み寄った私は、口を天に向けて喉を鳴らした。

「キャインツ！」

「え！？」

「うお！？」

うむ、こうして共にじゃれ合ってみると、案外小型犬モードというのも良いものだ。

「な、何だ………今の鳴き声」

「一体どこから！？」

童心を知らぬ私ではあるが、“無邪気に遊ぶ”というのもまた一興か。

「キャイン！ キャイン！」

「え！？ ザフィーラ！？」

「声低っ！」

ん？ どうしたというのだ？ 二人とも動きを止めているようだが。

何かあったのだろうか。

「どうした？」

「いやあ………その、なんっか」

「ザフィーラはさあ………その姿の時は、あんまり鳴かないほうがいいよ」

何？ それはどういうことだ？

シヤマルは何か教えてくれるだろうか。

私は後ろを振り返ってシャルルを見た。

すると、彼女は口元に手を当てながら足裏を引きずって後退していた。顔は何かに怯えているような。

様子がおかしい。私はもう一度ヴィータとアルフを見た。

「二人とも、シャルルの様子がおか」

そこまで言いかけた時、私は見た。

二人の表情から明らかに覇気が消え失せていることに。

何故だ。さつきまではあれほど明るい笑顔を振り撒いていたのに。まさか、この辺り一帯に何か不穏な力が渦巻いているのか？

主の身が危ない？

私はただならぬ予感がして、家の中へと駆けていった。

開け放たれていた窓から室内へと飛び込むと、キツチンの方にはシグナムが一人の少女と共に何かを作っているようだった。

少女の名前はフェイト。主はやてと同年代でありながら、我々守護騎士にも匹敵するほどの力を持つ強力な魔導師だ。かつては敵対していたものの、今ではこうして親しい仲となっている。

二人の表情には笑顔が浮かんでいる。時折聞こえるのは楽しそうな笑い声。

良かった。二人はまだ不穏な力にやられてはいないようだ。

私が背後に迫ると、二人がこちらに気付いて振り向いた。

「あ、ザフィーラ。へえ、アルフと同じ子犬モードになったんだ。

可愛いね！」

フェイトが私の頭を撫でる。

「ほう。それがさつき言っていたやつか。愛嬌があって良いじゃないか」

良かった。二人はやはりまだ無事だ。

「今シグナムと一緒にご飯の用意をしているから、もうちょっと待っててね」

「私はほとんど手伝っていないがな。どうも料理は苦手なんだ」

シグナムが楽しそうに笑っている。主や我々以外の者の前でこん

な表情をするとは。変わったな、シグナム。

しかし、今はそれどころではない。

私が事情を話そうとすると、それよりも先にフェイトが口を開いた。

「そうだ、ザファイラ！ アルフがいつもやるみたいにピョンピョン飛び跳ねて“頂戴”ってやってほしいな」

「チョーダイ？ 何だ、それは。」

「こっ、高くピョンピョン飛び跳ねて鳴くんだよ。アルフはご飯の時は嬉しそうにやるんだ」

「そう言ってフェイトが笑った。」

今は大変な事態なのだが、しかし、共に笑っているシグナムを見ると、ここで二人の笑顔を壊すのも忍びない。やっと手に入れた平穏と幸福だ。シグナムにも堪能してもらいたい。

止むをえん。

「キャウンツ！ キャウンツ！」

私は高く飛び跳ねながら両前足を揃えて動かした。

これがチョーダイか。

どうだ。これでお前は笑ってくれるのか。

「はっ！」

フェイトがその場に膝を着いた。

そしてその表情は、やはり何かに怯えているようだ。

「どうした！？ テスタロッサ！？」

「……………三オクターブ……………低い」

一体海鳴市に何が起きているというのだ。

私は正直困惑していた。何か、恐ろしいことがこの町に起こっているのか。

「一体どういうことなんだ！？」

「ザファイラ」

シグナムがフェイトを抱えたまま、静かに言った。

「少し話をしたい。いいか？」

「か、構わんが……………彼女は平気なのか」
「少し休ませておけば大丈夫だろう……………二階の部屋に行こう」
フェイトをソファーに寝かせたシグナムは、今度は固まってしまった私の体を抱き上げてキッチンを後にした。

「何！？ 原因が私の声にあつたというのか！？」
シグナムが静かに頷いた。

これは驚いた。彼女等が怯えていたのは、今の私の容姿と、それに似つかわしくない声とのギャップだった。

シグナムは日頃の鍛錬で研ぎ澄ましている精神力のおかげで持ち堪えていると言うが、彼女曰く「主はやてには多大なダメージを与える恐れがある」と言う。下手をしたら快復に向かっている両足への影響も考えられる。

なんと言うことだ。私の声が、そんなにも恐ろしい事態を引き起こしているのか。

「シグナム、私はどうしたらいい？」

「……………ザフィーラ」

「教えてくれ！ 私に出来ることは無いのか！？」

「とりあえず、今は黙れ」

「くっ！」

悔しい。平和な現在において、最悪は私の存在だったと言うのか。主はやての運命がようやく祝福の風に乗り始めたというのに。友に囲まれ、家族に囲まれ、苦しめられていた病すらも快復しつつあるというのに。

私は牙を重ねて食いしばった。

「ザフィーラ、諦めるな」

何を諦めずにいると言うのだ。私の存在が、主の幸福を脅かしているのだぞ。

「対処法が無いわけではない」

「な、何!？」

シグナムがそつと頷いた。

「本当か!？」

再び頷くシグナム。しかし、長時間私と向き合って話しているせいか、ついさつきと比べると若干顔色が悪い。

これは早いところその対処法とやらを施さなければならぬ。

「教えてくれ! 頼む! シグナム!」

「ごふう! ま、任せる……………」

どうすればいい? 一体どうしたら、私は幸せを壊さずに済むのだ?

「なるべく高い声を出せ。裏声でも構わん」

なるほど。外見に声を合わせればいいのか。

「よし、いくぞ」

「がっは……………! う、うむ……………清涼なる空気と清水流れる山に住まう、小鳥をイメージして吼えてみる」

「キャインッ!」

「フガアッフ……………! はぁ……………はぁ……………まだ低い! もう一度!」

「キャインキャイン!」

「ま、まっでぐ……………があああはあ……………それでは……………べルカの町を焼いた業火の雄叫びだ」

「これでどうだ! キャヒイインッ!」

「死……………ぐっふ! ま、待て! 少し間を置け……………あ、焦るな駄目か。想像以上に私の声は手強いようだな。

どうしたらいい。これ以上喋ってはシグナムとて持たん。

その時だった。

「……………よ、よし。手本を見せる。心して聞け」

何? シグナムが手本?

さすがはヴォルケンリッターの将だ。自らやってみせて教えるとは。

しかし、シグナムは元々が女性体だ。音域の高い声などは難しいものではないのでは。

私の表情を見て心を読んだのか、シグナムはうっすらと微笑んでから言った。

「一度しかやらんからよく聞け。外見との格差による声の破壊力というものが、どれほどなのかを」

思わず固唾を呑んだ。

この者、恐るべし兵^{つわもの}。

シグナムが深く息を吸い込み、背筋を伸ばした。

来る。

遂に来る。

シグナムの本気が。

「……………こんにちは！ ヴォルケンリッターの将、剣の騎士、シグナムです！」

「高ああガアツフアツフ……………！」

私はその場で倒れた。

あのシグナムが、騎士道を重んじ、自分にも他人にも厳しいあのシグナムが。

まさか、そのようなピチピチヴォイスだと！

その時、閉ざされていた部屋の扉が音を立ててゆっくりと開いた。「はっ！」

そこには、買い物から帰った高町なのはと、彼女に負ぶわれて二階に上がってきた主はやての姿があった。

「シグナム……………さん？ ぐふう！」

「ぐふうっふあっ！ ………………き、聞いてしもうたよ、シグナムのピチピチヴォイス」

そして二人もまた、魔性の声の餌食となった。

<了>

(後書き)

この作品は、アルカディアにも投稿しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7023t/>

ザフィーラキャンキャン

2011年5月31日08時40分発行